

J o u r n e y t o t h e E s s e n c e

アレックス・カー

美しき
日本の
残像

新潮社

Alex Kerr

美しき日本の残像

アレックス・カー

新潮社

うつく にほん ざんざう
美しき日本の残像

著者／アレックス・カー

*

発行／1993年7月20日 4刷／1994年6月5日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808

電話・営業部03(3266)5111・編集部03(3266)5411

*

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／大口製本印刷株式会社

*

価格はカバーに表示してあります。

© Alex Kerr 1993, Printed in Japan

ISBN4-10-526201-7 C0098

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



1456円

アレックスのこと

坂東玉三郎

僕がアレックスと出会ったのは、確か一九七八年ごろだったと記憶しています。僕が新橋演舞場で初めて鶯娘を踊っていた時で、河原崎国太郎さんのご紹介だったと思います。バラの花をお土産に持ってきてくれましたが、アレックスは最初から違和感なく話し合いのできる人物でした。僕はそのころ、初めてヨーロッパへ出かけカルチャーショックを受けていたのですが、アレックスはエール大学で日本学、オクスフォードで中国学を学んだだけでなく、色々な国々を旅行して歩いていたので、カルチャーショックを受けていた僕にいろいろ外国のことを教えてくれました。特に二人共イタリアが好きで、すっかり気が合い、その後、アレックスには僕のアメリカ公演の通訳などをしてもらいました。ともかく、外国独特の諺や文化には詳しく、僕は随分教えられるところがありました。これは海外で仕事をする上で大変役に立ち、今でも彼には感謝しています。彼が、「デビンチは「美はバランスの妙にある」と言っている」と話してくれたことがあります。だが、アレックスはアメリカ人にしては珍しく、ロジックよりも感覚で物事を捉えて行く性格の

持ち主だと思えます。全て感覚をもって行動していく。そんなところが、日本文化の根底に流れている、ある曖昧さを許容するといった面と上手く折合ったのではないでしょうか。

彼とはそんな具合で人生はロジックではないという点で、僕とも話が合うのです。言葉の巧みさだけでは伝えられないものを大切にするといえいいのかも知れませんが、ですから、ある物に對しいわく因縁をいくら言われても、その対象物に視線を向けることができず、お互い、感覚的に合うものしか崇められないところがあるのです。そんなところが気の合う理由だと思っています。

アレックスから、ある時、お互いに、コニョシエンティにはならないようにしようと言われたことがあります。もともとはイタリア語から来た言葉で、もの知りではあるが何も作らない人物を指す言葉だそうです。しかし、そういうアレックス自身、以前は知識は豊富でも、いざ生活をして行くという点については、かなり世間知らずのところがありました。

美的センスでいえば、ギリシア彫刻から始まってシルクロードを通じて東洋への憧れへと通じ、その方面の知識は勿論、エール、オクスフォードで学んだぐらいですから様々な知識は持っています。しかし、いざ生活ということになると、お金はどこから湧いてくるようなものなのだという感覚で暮しているようでした。その彼がすっかり変ったのは、アメリカの不動産会社であるトラメル・クロードで働くようになってからでした。ここでは六年ほど働いていましたが、アレックスにとってビジネスマンとして生活したことが、人生上の良い体験になりました。つまりビジネスマンの仕事を通じて社会的な常識を会得し、キッチンとした生活、暮しをする術を学んだの

でした。

しかし、だからといって、ユーモアを愛し、ロジックよりも感覚を大切にしながら、飄々として生きる彼本来の持ち味は今でも変わりません。このあたりに彼一流のバランス感覚があるので、そうした本来の持ち味を失わずに、同時に、社会人、大人としての成熟した感性と目を持つようになり、今回の本も大人になったアレックスにして、初めて書き上げられたのです。

外国を知っている大人の目で日本を見直してみると、一体、どんな風景が見えてくるものか——美しいものだけを求める無欲なアメリカ人であるアレックスだからこそ、今の日本の姿をとってもよく描くことができ、あれだけの文章をかくことができました。

いわば、美しい日本の姿を残していきたいというアレックスの情熱、日本への愛情から書かれたこの本を、是非、多くの方々に読んでいただきたいとします。最後に、愛すべきアレックスが今後も自分の理想を着実に現実化していくことを心から祈っています。

目次

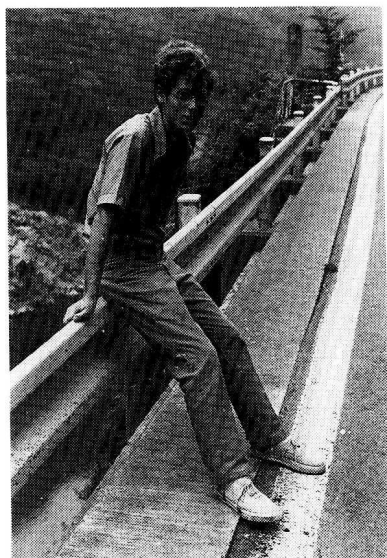
	アレックスのこと	坂東玉三郎
第一章	お城を探す	9
第二章	祖 谷	25
第三章	歌舞伎	45
第四章	美術コレクション	65
第五章	日本学と中国学	79
第六章	筆で遊ぶ	101
第七章	天満宮に住む	119

第八章	バブルの経験		137
第九章	僕の「関西七番巡り」		155
第十章	続「五番巡り」		173
第十一章	奈良の奥山		189
第十二章	東西の文人たち		209
第十三章	東南アジア		227
第十四章	最後の光を見ることができた		247

美しき日本の残像

第一章

お城を探す



最初に祖谷(いや)に入った日(1971年)

一番好きだったのは日本の家

六歳の時、僕はお城に住みたかった。

お城に住みたいという夢を持つ子供は、多分多いと思いますが、歳をとっていくごとにそれを忘れてしまうようです。しかし僕の場合、その夢が後々まで残っていました。父はアメリカ海軍に所属する弁護士で、その頃僕たちはイタリアのナポリに住んでいました。父が勤めから帰ってくると、僕は父の後についてまわり、「お城に住みたい」を毎日のようにくり返していました。あまりにうるさいので父も閉口してしまい、「世界のお城を全部おさめているヌスbaumという大地主がいるから、大きくなったら、ヌスbaumさんからお城を借りることができるよ」と、ある日教えてくれました。それ以来、僕はヌスbaumさんと会える日を楽しみにして待つようになったのです。

九歳の時、僕たち家族は帰国して、ワシントンDCに住むことになりました。そこで僕が入学した学校はかなり変ったところで、小学生にラテン語と中国語を教えていました。ラテン語はと

もかくとして、中国語の場合は、ずい分まれなことだったと思いますが、僕は中国語がとても面白く、なんとなく心の中のお城として中国の山を想い描くようになり、中国へのあこがれを持ちはじめました。

その後、父の転勤で日本に来て、横浜の本牧^{ほんぼく}にあったアメリカ海軍の基地に住むようになりました。僕が十二歳の時です。

この年、日本ではオリンピックが開催され、経済大飛躍への一步をふみ出したころです。しかし横浜にはまだ緑の色濃い山々があり、昔の町並みもあちこちに残っていました。ことに瓦屋根の美しさには心をうばわれました。市電に乗ると着物姿の女性も多く見かけましたし、夜になると、下駄の音が聞えてきたりしました。この頃から、中国へのあこがれは、日本へのあこがれへと変っていったのです。

なかでも一番好きだったのは日本の家です。当時は立派な日本建築の家が多く残っていました。母が、日本に住む外国人文化人グループに参加したので、そのような日本の家を見学する機会があり、僕も一緒に参加することができました。

葉山海岸にある宮内庁所有といわれていたある別荘（まだ米軍のものだったのでしょいか）や、東京の吉田茂の旧邸宅、三崎海岸の外国人用日本式別荘などに泊まりに行ったり、遊びに行ったりしました。子供の頃のことなのでくわしい点にわたる記憶はありませんが、イメージはあざやかに残っています。葉山の別荘で初めて見た畳は美しく清潔で、部屋は明るく、二階の部屋の窓からは遠く富士山を眺めることができて、僕はまるで雲の上に浮んでいるような気分になりました。

た。

三崎では、崖の上に松の木が並んでいて潮風に吹かれていたのを今でも目のあたりに思い出すことができます。そして、両親の友人が住んでいた古い日本の屋敷、門、庭、またそれに続く別な門、そして玄関など……。 (後年になり気付いたことですが、「玄関」というのは、家の入口ではないということです。扉^{へい}と門をいくつか通り抜けてやつとたどり着くところで、一番最後の門です。そのために「玄」という字が付いたのでしょう)。

その玄関に着くと、家の人達はひざまずいて迎えてくれたので、おどろいてしまいました。家の中に入ったら、まず廊下を通り、つぎに部屋、また廊下。そして大座敷。囲りの廊下だけは明るくて、広い畳の座敷は真暗でした。それは神秘的で、美しく、自分が生れて来る前の遠い遠い昔にもどったような感じでした。それが僕にとっての「お城」になったのです。

それ以後は、アメリカに帰ったり、日本に来たりをくり返しながら大人になり、一九六九年にエール大学の日本学部に入學しました。しかし、「日本学」の内容は、殆んど経済発展、明治以来の政治、「日本人論」などで、僕の心の中には、「この日本は、はたして僕が住みたい国なのだろうか」という疑問がわいてきてしまいました。この疑問に答えるため、僕は一九七一年の夏に日本全国一周の旅に出て、ヒッチハイクをしながら北海道から九州の指宿^{いぶすき}まで廻りました。

それは二カ月の旅になり、その間、信じられないほどたくさんの日本人の親切にめぐりあいました。ホテルで宿泊したのはたった三日だけで、あとは全部道すがらに会った人の家に泊めてもらったのです。外国人に甘い時代だったでしょう。

日本人の親切さに深く心打たれると同時に、この旅からはもう一つの収穫を得ました。それは日本の自然を発見したことです。一九七一年には、日本の田舎にも現代化の波が打ちよせていましたが、都会に較べれば、それはまだまだ昔のままの姿を残していたと言えます。道路も少なく、山は雑木林でおおわれていました。谷間からは霧がまるでマジックのようにわき上がり、日本独特のデリケートな木の細枝は風にふかれて羽根のようにふるえ、その合間に岩肌が見えかくれていました。日本は地理的に温帯地域とされていますが、その草木はむしろ熱帯雨林のような性格があるように思われます。四国や九州の山々を歩いた人達には判ると思うのですが、日本の山は一種のジャングルです。湿っていて、深くて、どこを見ても岩は、草やシダ、コケ、木の葉におおわれています。山道を車で走っていた時など、ふと、何億年もの昔にもどったような錯覚に落ち入り、次には霧の中からプロダクティルス（翼手竜）よくしゅりゅうが飛んで来るのではないかと感じ、何ともいえない不思議な気持ちになりました。

その頃の日本の自然を思い出すと涙が出てきます。それから二十年の間に日本の自然はガラリと変わってしまいました。雑木林は伐採されて、杉がキチンと並んで植林され、その杉林の中はシンと静まりかえっています。植物や動物の息づかいの感じられない砂漠と化してしまいました。山の奥まで道路が多く作られ、地すべり防止のコンクリートが山肌にくつきつけられて、美しい岩壁は姿を消しました。霧もわき上がってこなくなりました。

最近、「日本学」は世界的なブームになり、多くの学生が日本を訪れて来ますが、彼等は京都の庭園を眺めて、それが日本の自然だと思っています。かわいそうなことです。日本の自然はも

と不思議なもので、幻想的で、まさしく「神」がただよう聖域でした。タヒチにあるような火山性の山と、豊かな「雨林」のために、日本は多分、世界でも最も美しい国であったと思います。その自然が、もう過去のものになりつつあります。しかし、僕にとってはその日本の自然の美しさが心に深く残っていて、たとえ八十歳になっても、百歳になっても、山々の美しさは永遠に僕の心から消え去ることはないでしょう。

魅力的な四国の秘境

七一年の夏の旅は、四国の善通寺ぜんつうじで終わりました。最後の日、善通寺で知り合った友人は、「あなたがキット好きになるところに連れていってあげる」と言いました。そこで僕達二人はバイクに乗り、善通寺から四国の中心に向って出発しました。阿波池田に向ったのです。そこからは、吉野川に沿ってのぼってゆきました。兩岸の谷がどんどん険しくなり、この先、一体どこに連れて行かれるのだろうと思ったところ、「祖谷口いやくぐち」に到着しました。しかし友人は、「ここからです」と言い、さらに、クネクネとした細い山道を登りはじめました。

「祖谷」谷は徳島県と高知県の境にあつて、祖谷峡は日本で一番深い峡谷です。この日みた景色は、日本の自然の中でも最もファンタスティックで、子供の時にあこがれた中国の山を想いおこしました。丁度、宋時代の山水画に描かれた山々に似ていました。

川は青い「阿波石」のためエメラルド色にそまり、そびえ立つ岩壁は「玉」のよう。そして谷の向うの山からは白い滝が、まるで筆で書いたように真すぐに流れ落ちていました。その自然の